

# I 第29事業年度 事業報告書

(令和4年4月1日～令和5年3月31日)

## 1. 事業概要

### (1) 養豚情勢

- ア. 国内における豚熱（CSF）の発生状況は、平成30年9月以降で令和5年3月末現在、飼養豚において18都県86事例となり、防疫措置対象となった35万頭余りが殺処分されています。野生イノシシ陽性確認地域が拡大し、豚熱ワクチン接種推奨地域は北海道及び九州を除く39都府県が指定され、また、当県の野生イノシシからの豚熱陽性頭数は延べ132頭・直近6ヶ月間では10頭の検査陽性事例が報告されるなど、一層の防疫対策と警戒が重要な状況です。
- イ. 配合飼料価格は、ウクライナ情勢に伴う穀物価格の上昇等により高騰し畜産経営を圧迫しています。（4～6月期：前期比+4,350円/トン・7～9月期：同+11,400円/トン＝過去最高の改定幅・10～12月期：同 据え置き・1～3月期：同△1,000円/トン）現下の情勢は極めて異常な状況に置かれセーフティネットとなる配合飼料価格安定基金の拡充・運用がなされています。
- ウ. 国内の肉豚枝肉相場は、為替円安や国際市況の変動に伴う輸入数量減少の影響から、国産の引き合いが堅調なことで昨年を上回りました。（東京食肉市場 枝肉上物相場 年間単純平均557円/kg（前年比+48円/kg））しかしながら、物財各種の値上げ攻勢の影響を受け食品の家計消費は限定的な状況にあり、今後はコロナ禍の不安定要素・影響緩和によって外食及び内食需要の回復が期待されています。

### (2) 実施事業

こうした情勢のもと、着実に事業を遂行するため、3つの重点事項である「生産基盤・生産体制の充実強化」、「事業運営の健全化」、「防疫衛生・環境の保全強化」をかかげ、以下の取り組みを行いました。

- ア. 開放育種型ランドレースを活用した「ガッサンエル」系統の維持増殖をはかり、強健で発育性に富み、産子数の多いF1母豚の供給につとめました。
- イ. 施設老朽化による修繕や設備機械の再整備、防鼠対策を実施したほか、豚舎内外の環境整備・改善にあたり事業の安定運営にあたりました。なお、

令和3年度に発覚した不正事案の対処として、関係先からの実地監督指導及び管理棟執務室の改築を行い、事案の再発防止対策を講じました。

ウ. CSF ワクチンの適期接種の実践や、PRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）については供給するF1母豚全頭でPCR検査の実施、またPED（豚流行性下痢）対策として妊娠母豚全頭にワクチン接種を行い、防疫衛生対策の徹底・強化にあたりました。

エ. 環境保全については、臭気の発生防止と廃水処理施設からの排水の水質保持に努め、「公害防止協定」に定める基準値を遵守のうえ、臭気測定及び水質検査の結果は、検査の都度「環境保全協議会」へ報告いたしました。

### （3）事業概況

#### ア. 取扱頭数

（ア）種豚販売では、ランドレース種の能力維持をはかりながら計画生産につとめましたが、生産資材費の高止まりや後継者不在などで需要先養豚農家での離農廃業する動向が続き、取扱頭数は1,001頭（計画比△71頭・前年比168△頭）となりました。

（イ）子豚販売は、供給先の飼料会社 肥育預託農場で年度初めより廃業者が発生したため932頭（計画比△1,038頭・前年比△932頭）となりました。

（ウ）肉豚販売は、センター本体では子豚販売の減少に伴い肥育仕向け頭数が増加したこと、平岡肥育農場は全農子豚生産農場からの素畜導入が年度前半の出荷遅延の相関で減少したこと等から9,967頭（計画比△72頭・前年比+467頭）となりました。

#### イ. 生産技術成績

センター本体の繁殖・離乳成績は別表1のとおり、受胎率の向上により分娩腹数が確保され、一腹当り正常産子数は前年比102.5%となりました。交配後の母豚飼養管理、夏場の暑熱対策などの事故改善により生産性は良好な状況です。常時飼養母豚数を削減しながら、一腹当り離乳頭数は9頭台となる等、技術成績は向上しています。また、平岡肥育農場の肉豚販売頭数は年度前半の素豚導入頭数の兼ね合いから減少したものの、枝肉重量並びに上物率は昨年度に続き高レベルで維持されています。

(別表 1)

区 分		単 位	R 4 年度	R 3 年度	R 2 年度	R 3 比(%)	R 2 比(%)
センター 本体	交配頭数	頭	686	722	736	95.0	93.2
	分娩腹数	腹	596	609	596	97.9	100.0
	正常産子数	頭	6,096	6,077	5,940	100.3	102.6
	〃一腹当り	頭	10.23	9.98	9.97	102.5	102.6
	離乳腹数	腹	597	614	594	97.2	100.5
	離乳頭数	頭	5,405	5,304	5,289	101.9	102.2
	〃一腹当り	頭	9.05	8.64	8.90	104.7	101.7
平岡 農場	子豚導入	頭	7,917	7,584	7,920	104.4	100.0
	肉豚販売	頭	7,132	7,308	7,677	97.6	92.9
	枝肉重量	kg/頭	74.6	73.9	74.5	100.9	100.1
	上物率	%	70.1	73.7	67.2	95.1	104.3
	事故率	%	6.03	6.45	3.89	107.0	64.5

## ウ. 収支状況

## (ア) 事業収益

- ①合計 613 百万円(計画比 110%・前年比 116%)、センター本体 267 百万円(同 116%・同 112%)、平岡肥育農場 345 百万円(同 107%・同 120%)。
- ②取扱品目別では、販売数量の減少が顕著となった種豚販売が 79 百万円(同 92%・同 86%)、子豚販売は 12 百万円(同 48%・同 50%)となりました。
- ③肉豚販売は、枝肉相場が堅調に推移したことで、センター本体の年間販売加重平均単価が 528 円/kg・平岡肥育農場は 552 円/kgとなり販売高は 411 百万円(同 110%・同 114%)となりました。
- ④事業雑収入は 92 百万円(同 140%・同 161%)となり、配合飼料価格の高騰が甚だしい中で、同安定基金が全期間発動(42 百万円：1～3月 5,200 円/ト、4～6月期 9,800 円/ト、7～9月期 16,800 円/ト、10～12月期 14,500 円/ト、)し、行政支援措置など(23 百万円)を受入計上しました。
- ⑤飼育豚評価益は期末在庫頭数の増加や枝肉相場が堅調に推移(東京食肉市場の上物相場 年間単純平均@は当年度 557 円/kg・前年度 509 円/kg)し

たことで、評価単価が計画 前年実績を上回り 17 百万円となりました。

(イ) 事業直接費

- ①596 百万円（計画比 111%・前年比 116%）で、その内訳はセンター本体が 266 百万円（同 117%・同 121%）、平岡肥育農場は 330 百万円（同 107%・同 111%）となりました。
- ②科目別では、素畜費が子豚の導入頭数の減少で 129 百万円（同 95%・同 99%）、また、飼料費は購入数量が 3,508 トン（同 104%・同 105%）に対し、価格高騰の影響から 276 百万円（同 126%・同 134%）で、全事業直接費の 46%（前年 40.1%）となって甚だしい費用増嵩となりました。
- ③事業労務費は、要員欠員の状態が年度末に漸く解消された中で 62 百万円（同 95%・同 101%）となりました。今後は要員確保に向けた雇用条件の見直しなど、その課題解消・対策を抱えている認識にあります。
- ④保守修繕費は豚房柵・換気扇などの再設置・修繕の事案対応にあたり 9 百万円（同 160%・同 202%）と増加しました。施設設備・機械等の老朽化が顕著な実態であり、今後も資産取得及び修繕を計画的にすすめます。
- ⑤雑費は家畜ふん尿にかかる処理経費が増嵩し 24 百万円（同 125%・同 125%）となりました。今後も周辺環境保全の維持安定のため、関係取引先と緊密な連携をはかりながらすすめてまいります。

(ウ) 当期利益

一般管理費は出向者受入人件費の増、業務費の印刷消耗品費（P C 周辺機器導入）などの合計で 16 百万円（計画比 106%・前年比 113%）、事業外損益算入後の当期利益は 0.2 百万円となりました。

エ. 財務状況

- (ア) 流動資産は 391 百万円（前年比+29 百万円）、固定資産は 20 百万円（同+0.1 百万円）で、資産合計は 411 百万円（同+29 百万円）です。流動資産の棚卸資産及び雑資産（未収金・仮払金）の増が要因となっています。
- (イ) 流動負債は 173 百万円（同+37 百万円）、固定負債は 19 百万円（同△7 百万円）、負債資本の合計は 411 百万円（同+29 百万円）です。資本は当期剰余金の減、流動負債は資材費増嵩に伴い事業未払金が増加の状況です。

以上